



日本現代文學全集・講談社版 103

---

田中千禾夫 福田恆存 集  
木下順二 安部公房

日本現代文學全集

103

田中千禾夫・福田恆存 集  
木下順二・安部公房

編 集

伊 藤 整  
龜 井 勝 一 郎  
中 村 光 夫  
平 野 謙 吉  
山 本 健 吉



昭和42年10月10日 印刷  
昭和42年10月19日 發行

定 價 600 圓

© KÔDANSHA 1967

著 者  
お 夫 存 二 郎 房  
か 禾 恆 順 公  
ち 千 下 部  
な 中 田 木 安  
た 田 福 木 安

發 行 者 野 間 省 一

印 刷 者 北 島 織 衛

發 行 所 株 式 會 社 講 談 社

東 京 都 文 京 區 音 羽 2-12-21  
電 話 東 京 (942) 1111 (大 代 表)  
振 替 東 京 3 9 3 0

印 刷 大 日 本 印 刷 株 式 會 社  
寫 真 株 式 會 社 興 陽 社  
版 製 株 式 會 社 大 進 堂  
製 本 株 式 會 社 岡 山 紙 器 所  
製 函 株 式 會 社 第 一 紙 藝 社  
背 皮 株 式 會 社 石 井  
表 紙 ク ロ ス 日 本 ク ロ ス 工 業 株 式 會 社  
口 繪 用 紙 日 本 加 工 製 紙 株 式 會 社  
本 文 用 紙 本 州 製 紙 株 式 會 社  
函 貼 用 紙 安 倍 川 工 業 株 式 會 社  
見 返 し 用 紙 三 菱 製 紙 株 式 會 社  
扉 用 紙 神 崎 製 紙 株 式 會 社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたしません。

田中千禾夫集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

教 育……………五

マリアの首……………三

自由少年―花の幻―……………六

作品解説……………奥野健男 四四

田中千禾夫入門……………中田耕治 四三

年 譜……………四六

参考文献……………四四

福田恆存集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

ホレイション日記……………二三

龍を撫でた男……………五六

作品解説……………奥野健男 四六

福田恆存入門……………中田耕治 四三

年 譜……………四三

参考文献……………四四

木下順二集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

彦市ばなし……………三〇五

夕 鶴……………三三

暗い火花……………三六

オットーと呼ばれる日本人……………三六

作品解説……………奥野健男四八

木下順二入門……………中田耕治四五

年 譜……………四三

参考文献……………四四

安部公房集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

幽霊はここにいる……………三五

城 塞……………三九

作品解説……………奥野健男四九

安部公房入門……………中田耕治三六

年 譜……………四〇

参考文献……………四六

田中千禾夫集

なにゆえに

御顔  
を

北月  
り玉  
うそ

田中  
千代  
あ

# 教育 一幕

——新しき俳優座劇場のために——

登場人物  
瑠王<sup>ルウ</sup> 父  
繪禮奴<sup>エリヌ</sup> 母  
禰莉<sup>ネリ</sup> 娘  
翡翠<sup>ヒスイ</sup> 江流 醫師  
若い女中

(作中、ボードレールの詩は佐藤朔譯による)

森のそばの小別荘。構えは古い農家の粗豪な趣を残しながら近代化した擬つた細部。

居間をも兼ねた廣い厨房。暖爐だけは木をくべるようになってはいるが、調理臺など電化されていて、年を経た重苦しい澁さに負けぬ明るいところもある。飾りつけ、置き物、家具の好みの示すところ、この住人たちが女であることは争えない。つまり、若干、白粉臭いのであるが、子供っぽく清潔でもある。

左右いずれかに、内玄関に通じる扉と、個室に通じる扉と、二階に行く階段とがある。壁(或いは柱)を割り抜いて厨子を作り、マリあの像が安置され、燭燭立てが二本。

午後、おそく、晴天。  
かすかな角笛の音。

酒好き特有の爛れた目をしてはいるが、長年の風雨に曝されながら耐えてきた古武士のような面持、瑠王(六十歳)、ソファでフランデーを呑んでいる。

それと向かい合いに繪禮奴(四十五歳)、小柄で、丸顔の美貌。椅子のはしに落ち着きなくかけ、白いハンケチを兩手で握りしめたり緩めたり引つぱつたりしながら、一點を見詰めている。白いレースのついた黒ずくめの衣装をまとっているが、殆んどあどけないくらいに可愛い色香を蒸えて艶々した重そうな真珠の首飾りが痛々しい。

禰莉(二十五歳)、肩先までのセーターに、裾のほうはほとんどビツタリして、つんつるてんに見えるほどのズボンをはいている。この頃の言葉では、鬨牛師短袴である。靴下なし。上下とも囚衣色とも言うべき、褪めたようなしかも濃淡のある青色である。目尻が鋭く、唇は厚くない。一冊の詩集を手に、あたかも瑠王と繪禮奴の兩人の存在を知らないものの如く、兩人の後方をゆつくり往復している。口のなかで讀んでいるが、はつきり聞かえない。

かなりのだんまりが、この状態のまま、つづいているらしい。が、瑠王はしかし、何か成算あるものの如く、時には鼻歌も出て、超然と自分をたのしんでいるようである。こんな彼は今までに恐らくなかつたことである。

繪禮奴、ハンケチで卓上をゆつくりと撫でる。そして立ち上がる。

繪禮奴(瑠王を見ないで)では、私、部屋に下がらせていただきと  
うございますの。

瑠王 あ、どうぞ、どうぞ。(待つてました、と言わんばかり)

繪禮奴、去ろうとする。

瑠王 おい、金。金。(卓上を頸でさす)

繪禮奴 禰莉さん、あなた、あとで……。

瑠王 たまには何か長い音を出してみなすつたらどうじゃね。意味などわしにはどうでもいいです。あなたの聲は、いつきいてもきれいな聲じゃ。年をとればとるほど、うるおいの出でくる聲じゃ。温かい雪みたいさ。はは……。

繪禮奴はずでにいない。消える前に、厨子の前で膝ますく。



瑠王 繪禮奴……(答なし。びんを逆きにして最後の一滴をつぐ。不満そうに) わしが来るちゆうことはわかつとるじやないか。たしかに女中に買わせにやつたんだね。

禰莉 (前の動作をつげながら) やりました。(聲音の冷やりとした聲である) いつもなら、四五杯でおやすみのようですから……。

瑠王 さよう。いつもなら、さつさと喜んで退散したところじやが、(意味ありげに) 今日だけは、ちよつとな……。

禰莉 (同じく) ちよつと、何でございますか。(聲にだして) 眠りたし! 生きむよりむしろ眠らむ! 死の如く快き眠りの……。

瑠王 何をそんなに一所懸命讀んでんだい。

禰莉 講談。銅あがらの如く磨かれしなが美しき……。

瑠王 お前の腰は一向に肥くならんな。やつぱり一生、石女で通すつもりか。それとも戀しい男がまだ見つからんのか。え? そらあ當節じや、共稼ぎでもせんことにや暮らして行けまい。殊にお前みたいに贅澤に育つた娘を養うには金がいるからな。

禰莉 わが嗚咽をしずめて呑み込むためには、わが寢床の深き淵に及ぶものなし、力づよき忘却、力づよき……。

瑠王 女醫さんもええが、いつそ藥劑師の免状をとるんじやな。ちよつとしたカフェでもつけて店を開きや……。

禰莉 その資本をどうしますの。あたし、あなたからこの上お助けいただこうとは思っていません。だからあたし、病院につとめて

いるんです。

瑠王 わかつたわかつた。どうせわしは憎まれ者さ。まだ歸つて來んのか、女中は。くそつ!

禰莉 力づよき忘却、なが唇の上に棲まい、「忘却の川」は接吻の中に流れ……。

瑠王 (ゴップを握つたまま、ふらふらと立ち上がる) まだ歸つて來んのかと聞いとるんじや、わしは。そんなお高くとまつとらんで、ちよつとは親爺の相手になれ。

禰莉 (ますます、無表情に) 村の酒屋は遠うございます。(暗誦して) 眠りたし! 生きむよりむしろ眠らむ! 死の如く……。

瑠王 (いきなりゴップを叩きつける) お前はそれほどわしが憎いのか、親爺が憎いのか……もしわしが、本當の親爺でなかつたら……もしそうだつたら、お前はわしを可哀そうに思つてくれはすれ、わしを憎むことはないじやろうな。いや、憎む以上に、わしを無視

してこの。抹殺しとるぞ、人間を。お願いじや、な。せめて……せめてこのわしを哀れんでくれ、それだけの情をかけてくれよ。その冷たい目は、わしにはたまらんのじや。冷たいと言より、この世で一番、わがまま無類の目じや。やめてくれ、それは。お願いじや、情をにかけてくれよ。(膝ますいて、心細く泣きじやくる) この孤獨のわしに。この絶對なものが、なぜに……なぜにか

くも怖ろしいのじや……怖ろしいよ……怖ろしいよ……。

繪禮奴現われる。シヨールを被つている。

繪禮奴 禰莉さん、ご一緒に出かけましょう。

瑠王 繪禮奴。もう亂暴はせん。わしは酔つとらん。はは……酔つた振りをしとるだけじや。甘つたれてみたのじや。わしの正體じやよ、これが、はは……(立ち上がる) 本音を吐いたんじや、はは……。

繪禮奴 あなた様がお出ましでなければ、私どもが出かけとう存じます。そう存じますわ。

瑠王 (もとの陽氣と共に、ソファに戻り) よしよし。かりそめにも主人面をして見せたのだつたら許しておくれ。わしもそれほど鈍感な男じやないわい。月に一度の訪問をたかが五分か十分延ばしたからつて、そうわしを苛めんでもよからう。わしはもちつと、へへ……呑みたいだけさ。それに今日はわしとしてはちよつとした、へへ……或るちよつとした理由もあることな。禰莉、そんなガラスのかけらは後回しにして、まあ、わしの前にお坐り。

繪禮奴 (聲が懐えて) いいえ、ご用事がお済みになれば、お歸りい

たたくお約束でございます。お氣の毒と存じますが、そう存じますが。ですからどんな理由がおありにしても私どもは……あなた様とこれ以上、一つ屋根の下にいることは怖ろしゆうございませぬ。私どもの禮儀を、どうか守らせて下さいませぬ。(歩きだし)

禰莉さん、おいで、そのお金をしまつてね。

禰莉 (動かず)

繪禮奴 禰莉さん。

瑠王、ソファのあたりにおいた帽子と傘をとり、片手にトランクをとり、おとなしく立ち上がる。行きかけて、

瑠王 (飄忽に) 繪禮奴さん、長い間、どうも……わしは今日……いや、ま、達者でな、はは……。 (去りかける)

禰莉 (思わず) 待つて。

繪禮奴 (振り向きもせず) 禰莉!

禰莉、かけ寄つて、瑠王の帽子とトランクなどを取り上げる。

繪禮奴 禰莉!

禰莉、亂暴に瑠王を元の所に坐らせる。瑠王、面喰つて、「え? え?」と、しかしされるまま。

繪禮奴、初めて昂然と、足音高く出て行く。

鈴のついた内玄関の扉の音。

瑠王 (感動して) 禰莉! (両手をとろうとする)

禰莉 さわらないで。それよりそのちよつとした理由つてのは

……。

瑠王 沃チンかい、煙草かい、指先が黄色く染まつてるのは。

禰莉 (向かい合いかけて) 理由つてのは何ですの。

瑠王 聞きたいか、うん? (びんをラッパ呑みにして) おせいな。(わざと他の事を口にしてみる)

禰莉 何ですの。

瑠王 ママ……放つといいていいのか。

禰莉 くせよ。三十分もしたら、きよろつとして歸つて来る。

瑠王 そうか。……ねえ、禰莉、お前、わしと一緒に旅行する氣はないか。(そつと) 二人だけで。

禰莉 (沈鬱に) 旅行はしたい。できるだけ遠くへ。……大きな川のあるところまで。

瑠王 川? 海はどうじゃね。

禰莉 海?

瑠王 (つと立つて、禰莉のそばにかがみこみ) ね、わしの島へおいで。岩だらけの硫黄の島じゃが、すぐ隣に椰子とジャングルに被われた緑の島があつてな。生活の島じゃぞ。可愛い土人もいる。昔、

わしが、そのう……暮らしたつた小屋がそのまま残つとるよ。

禰莉 牙魅亞とね。

瑠王 へへ……黒ん坊の牙魅亞か。(ふつと) え、お前、今、何と言つたね。

禰莉 (つと立つて離れながら) 巴宇羅はどうしたの、巴宇羅は。

瑠王 巴宇羅? ……いつたい、お前、どうしてそれを……。

禰莉 どうしたの? 巴宇羅は連れて行かないの。

瑠王 今度はわしがあいつに殺されたのさ。

禰莉 ははあ……逃げられたのね。いい氣味!

瑠王 くそめ! 何をしとるんじゃ、女中は。

禰莉 だから、かわりにあたしを連れて行くつての。考えたわね。

瑠王 何も強いてとは言わんよ。わしはただ、親らしく、お前さんの氣晴らしになればと思つて言つてみたまでじゃ。人間どもの息でつまるようなこの世界がお前さんたちは氣に入つとる。このぬ

くぬくとした小屋はお前さんたちの巢じやからのう。

禰莉 でも……もし、あたしが行きたいと言つたら。

瑠王 へえ。どういふ風の……。

禰莉 どうか行きたい。人のいない所へ行きたい、眠りたい……ひとりで行きたい……(急に叫ぶ) ああ、なぜ、ママはあたしを

女に生んでくれたんだらう。

瑠王 きまつてるじやないか。愛されるためさ。

禰莉 愛されるつてどういうこと？ そのために女は皆、不仕合わせになつてるじやないの。最初がママ、次が爾安奴、お次が黒ん坊！……最後に危うく助かつた巴宇羅。

瑠王 (猛然と) ちがうぞ。お前のおふくろだけはちがうぞ。こうし小綺麗な洒落れた住居で、何不自由なく……。

禰莉 小綺麗？ ふむ、あなたのお婆さんには向いてるわね。爾安奴を圍つておくには、牙魅亞を窒息させるためには、そして、ママあたしを生きながら葬るためには頃合いの家ね、この家は。何にも知らないと思つてんの。ああ、黒ん坊の體臭が、密造酒の匂いが、いまだにその臺所にただよつてるわ。(唾を吐く)

瑠王 誰に聞いた。

禰莉 私立探偵だつて、興信所だつて、調べようと思えばいくらでも。

瑠王 ママの入れ知恵か。

禰莉 さあ、どうだか。あたしよ、實行したのは。

瑠王 そんなにわしの跡をつけ回して、お前いつたい、わしに何の興味があるんじや。……ははあ、わしがどつかに財産をかくしとるでも思つたな。わしに、かくし子でもありやせんか疑つとるんじやな。(輕蔑して) ふーん、そんな女か、お前は。

禰莉 ちがう、パパ。

瑠王 そんならなせ。

禰莉 あなたつて男を知りたいだけ。ただそれだけよ。

瑠王 それでわかつたのか、わしつて人間が。

禰莉 ……………

瑠王 昔、ずうつと昔のわしのことをほじくり出しゃ、ママのことだつて明るみに……(眼色をうかがつて)へえん？

禰莉 何のことよ、それ。ママのことつて？

瑠王 まあ、もうどうでもええわい。わしにかくし子でもありや、

誰がこんな家に来てやるもんか。よく聞けよ、禰莉。わしが恥を忍んで、男としての恥を忍んで、お前たちの挑戦と輕蔑に甘んじながら、月に一度、生活費を渡しに来るのはいつたい何のためだと思つとるんじや。

禰莉 夫として、親としての義務のためでしょう。でなかつたら公證人の費用を儉約するための事務でしよう。

瑠王 くそつ、この女餓鬼は！

禰莉 少なくとも愛情のためじやない。

瑠王 (怒鳴る) 愛情のためでなかつたら何だと言うんだ。

禰莉 ここは鑛山じやございませぬ。

瑠王 わしはな、鑛山じや、何百人もの荒くれ男を指圖しとる人間じや。忙しいんじや。ただの事務のために、何を好んで、のこのここまでやつて来るもんか。よし、お前のその、冷たくとりすました顔に叩きつけてやる、たつた一つの言葉がある。……わしは、今日を限りに、わしの島に歸る。二度ともう歸つて來んつもりじや。

禰莉 巴宇羅に逃げられたからね。

瑠王 言うとも。だからお前に會つてやるのも今日が最後だ。誰にも言わず、わしの骸骨と一緒に、土のなかまで持つて行く、そうきめとつたんじやが、お前がわしのその秘密の快樂を誘惑して引つ張り出したんじや。お前がオギャアと飛び出してから二十五年、わしの胸の底の、底のほうにひたかくしにとつた……一つの言葉。

禰莉 それほどの言葉があろうとは思わない。

瑠王 なに……あるぞ。

禰莉 そんな脅かさないで、早くおつしやつてごらん遊ばせ。お芝居氣取りでも何ででも。(相手を小馬鹿にしているふうがある)

瑠王 (憎悪にたぎりつつ) お前つて女は……おふくろに輪かけた代

物じや。よし言つてやろう。これでもわしに愛情がないかどうか言つてやろう。禰莉、お前はわしの娘じやないんだ。

禰莉 (硬直して突つ立つたまま)

瑠王 どうだ。たまげたか、はは……(勝ち誇つたように歩き回る) ち

つたあ、恥ずかしいか……おい、何とか言つたらどうじやね。

禰莉 あんまり……ほつとしてるのよ。嬉しいんで口もきけないつてとこ。

瑠王 口がきけるようになつたら、ママに聞いてみい。貞節無比なる奥方に聞いてみい。(もとの所に戻り、パイプに火をつける) お前が八カ月の月足らずでお生まれ遊ばしたのは、そもいかなる理由によるものか聞いてみい。

禰莉 (いきなりかけよつて、瑠王の首を両手でしめつける) まだそんな

こと言うか、言うか。あたしが、どんなにパパを……パパを……。

瑠王 うわはは……止せよ。(たのしそくに父親らしく) はは……お前

さんの手で、わしが締め殺されてたまるもんか。

禰莉 どんなに……。

瑠王 はは……こら止せよ、くすぐつたいよ……。

禰莉 どんなに愛して……愛して……どんなに……(ぐつたりと、瑠

王の膝に崩れ落ちる) ……ご免なさい……。

瑠王 気が狂つたのかと思つたぜ。若い娘つて奴あ、ほんまに……。

(禰莉を抱き起てそうとする)

禰莉 さわつちやいや、いや、いやつたら、いや、いや……。

瑠王 こんなにわしの告白がきくととは思わなかつた。(自分の横にかけさせ、またブランデーのびんを逆さにしてみたりする) 初めはな、あんまり癪に障るんで、お前を驚かして凹ましてやろうという魂膽じやつた、初めはな。だがしかし、いつかはお前に打ち明けたい、ただし、ママに内證にな、そう思つてはおつたんじやよ。なぜつて、お前の實の親が、わしみてえな奴じやありがたくもない

からな。

禰莉 (否定的なような身振り)

瑠王 今を去ること二十五年か……わしとしてみれば、お前がママに連なる縁でわしを憎むのも當たり前じやと思うつたから、べつに、お前さんは苦にもならなかつた。だから、今、わしが本當

のことを打ち明けるのも、禰莉、お前のためじやよ。お前さんの父親が、わしなどより學問もあり、どんなに立派な、見事な男だつたかと教えてやるためさ。

禰莉 そんなに……そんなに卑下しなくてもいい。

瑠王 いや、これはわしの主義じやよ。鑛山學校にいるときからの親友でな、そらあ仲よしさ。わしはどつちかと言うと、かんでいくし、あいつ、佛蘭西亞は學問。それをお互いに利用し合つて、素敵な石を見つけたもんだ。山歩きが商賣じやから陽に灼けてな、お互いに眞つ黒な顔しつたが、その相棒の目は、ええ目じやつたぞ。夏のどんなに照りつける太陽の下でも、あいつの目は、それそれ、ちようど、お前さんの目……(立ち上がる) こうなりや御自ら家探しだ。(墓所の方へ行く) 御自ら家探しだ。(戸棚を探しながら) なるほど、おかしな匂いがあるわい、なつかしいな。牙麩亞か……お前さんの目、そつくりじや……沼みたいな澄んだと言うか、永遠に水々しいんじや。沼もそれ、主のいる沼よ。まつたく神祕的、とも言いきれん、そうだ、夜の砂漠の水じやな、現實的じやよ、これは。(葡萄酒のびんを探し出す。棚からコップをとる) わしの水はこれじやて。これでがまんすら。そういう目しつたもんだから、あいつ女に好かれるの好かれねえのつて……。

禰莉 (顔を背ける)

瑠王 不思議なもんだ、あいつには皆ころつと參つちやうらしい、一目見ただけでもさ。どんなにわしはそれが羨ましかつたことか、ときには殺してやりたいほどな、はは……佛蘭西亞の畜生奴! (元の所に戻る) 酒も呑んだな。金の拂い振りがまたきれい

じやつたから、すつからかんのくせに、そらあもてた。女のほうから貢ぐほどにな。

禰莉 馬鹿だわ、そんな女。

瑠王 いや、ところがこのわしときたら、そつちのほうはからだめで、どういうわけか女が一向寄りついてくれん。この氣持ちわかるか。だから酒ばつかり呑んどつた。そこにだ、一人の生娘が現われたと思ひええ。さあ、これからじゃ、話は。

禰莉 (すでに冷靜を取り戻し、小聲でジャズの小唄か何か口ずさんでいる。最大の興味を最大の關心をもつて聞いていることができないらしい)

瑠王 それまでわしらに交き合うてくれる女と言や、酒場に集まる錢相手の女郎みたいな奴ばつかりだつたからな、わしらにはその娘が、まつたくの話、女神様みてえに見えたもんじゃ。

禰莉 (薄く笑う)

瑠王 だいぶ、左り前に傾いてはおつたが、何しろ車寄せのあるお邸のお嬢さんだつたからな、その娘は。ブレボーグのある古い田舎の家、覺えとるか、おばあさんの家。葡萄の丘の麓の。

禰莉 覺えない。

瑠王 初めて會つたとき……魂を咬いとられるちゆうのはあのこつた……わしは、その娘のなかに、不思議な灯を……命の灯を見たのじゃよ。ああ！ わしにとつては不吉な灯じやつたかもしれんなあ。

禰莉 命は滅び、腸は腐れ果て、蛆虫どもの棲みかになる。

瑠王 それは講談か。わしは面と年にや自信もなかつたくせに、何に自惚れてか、それまで貯めこんだ貯金で娘の喜びそうな品物を買つちやブレゼントした。胸をドキドキさせながら通つたもんじや。三十五の面下げてよ。あの眞珠の首飾りも、わしがそんなき、おくつたもの一つさ。

禰莉 ああ！ (かすかに身悶えして顔を膝の間に入れる)

瑠王 しかしな禰莉、わしが戀人氣取りで好い氣になつとるひま

に、勝負はとつていつとつたのさ。間抜けだよ、實際。(笑いながら) 佛蘭西亞の畜生め！

戀心つて奴はな、いいか禰莉、男と女が一目見合つたとき、もうそんときに兩方から發生するもんらしい。後からいろいろと、やくたいもないものを付け足すのは當節の悪い風潮じやな。そういうもんじやよ。わしは、間抜けながらもそう悟つて、諦めた。仲よしのためにお祝ひしたよ。

そうしたらなあ、あにはからんやじや、運命つて奴は奇て烈な奴よ。その勝利者が、ぼつくり、この世から姿を消した。

禰莉 (顔を上げる)

瑠王 肺炎でな。たつた二日、あつという間もありやしねえ。しかも相手の娘の胎には、もう二月も前からお泊まりの赤ん坊だ。ね、それがお前さ。その先は、もう冗口言わんでもよからう。わしは萬事承知の上で、晴れて夫婦の指輪をとり交わした、ママとな。(その指輪を、ぐるぐる回している)

禰莉 ママが、そうして下さいつて、あなたにお願ひしたんですか、ママのほうから。それともあなたが……。

瑠王 そうさ、もちろん、ママのほうからな。……父無し子を生む勇氣はなし、家名や世間態は怖い、へへ……だから恥を忍んで、わしの前に、赤の他人よりもまだ悪い、愛してもおらん男、たんまり金はあつても、十五も年上の不細工な男の前に頭を下げたのさ、はは……これでママがわしを憎む理由がわかつたらう。

禰莉 そこであなたは、愛されてもいないことがはつきりわかつてるのに、大喜びに勇みに勇んで、ぬけぬけとママの手をとつたつてわけですのね。恥知らずのするこつたわ。

瑠王 そう思うほうがお前の氣に入るのなら、あえて異議を唱えようとは思わん。なるほど、ママの不幸を利用した、不幸につけ込んだと言われても仕方はない。おつと待つとくれ。自分から、わしは、こんなこと言い出しとること參酌してくれよ。その通りだ

と簡単に思われちゃ、こつちの計算が狂うからな。(おどけた目つき)

禰莉 わかつてるわよ。あなたの主義とやらを認めてくれつてわけね。

瑠王 大きに。つづけるぞ……いいか、どんな間抜けでも、お人好しでも、卑しい底意が、お膳を据えられれば、摘まんで見たくなる卑しい氣持が、かくされておらんとは言えん。

禰莉 そうでしようとも。ええ、そのはずよ。

瑠王 ただそれはな、(悲しそうに、ちらと禰莉を見て)ただな、人間の魂がそつと寄り合おうとするな、眞心から。……素直な、ありのままの心さ。と言つて自然の本能ともちがう、そんなでたらめなもんじやない、……うまく言えんのだが、ま、その邊のところと思つてくれ。

禰莉 ふむふむ、それで。(嘲笑をおさえている)

瑠王 そういうものにだな、自分というもの、自我、自己というものの働きの何にもなく、身を任せるときじや、卑しいもんではなくならずわしは信じとる。わしが自分から卑しいとへり下つて言つとるその氣持は、神様の思召しとまではいかんでも、いやらしい自分以外の、まあ運命のようなものを、わしが何よりも尊敬したいからじや、わかるか。

禰莉 (遂に笑いだして) そんなことくらいわかるわよ。そんなご大層に回りくどく言わないでも、惚れたつてことでしょ。一口にそう言つちやえはずむじやないの。何を苦しんで理屈をつけたいの。

瑠王 (素直に) そうか……そうだな。やつぱりわしは駄目なんじやな……(急に) いや、ちがう、ちがうぞ。お前にはわからん。お前のおふくろにもわからん。男と女が寝らにやならんと言うのは末の末じや。禰莉、寝るといふことはどういふことか知つとるのか。からみ合つた手と脚が骨もきしむほどにな……。

禰莉 (立ち上がり) 止して。黙つてよ、もう。珍しくもない。

瑠王 そりやお前は醫者の卵じやから、人間のからだの部分部分のことは、わしより詳しかろう。だがな、部分部分つて奴は生き物じやねえ。生きたからだを、目が物を視、耳が音を聴き、同時に赤い血がどつくとどつくと漲り溢れ、絶え間もなしに産ぶ聲をあげる心臓……そういうものが一つにまとまつた、調和した、そのまを切り開いたことがあるか。なからう、はは……。(突然、自身をからかうような高い笑い)

禰莉 止してつたら、下らない、實に下らない。

瑠王 はは……お互いのからだだがメスになつて、お互いを傷つけ合ひ、いたわり合うその血しぶきの中で、お互いのからだをむごたらしく開き合うんだ。お互いの血が交じり合ひ、鳴りひびくんだ。知らねえだらう。ざまあ見ろ。はは……。(再び乾いた笑い)

禰莉 結局、それがあなたの謂うところの運命なんですよ。なぜそんな笑い方するのさ。懂れなんですよ。(いらいらして)ラムウル・セル・グウ・ド・ラ・プロスチチュシヨシ！ ただの趣味よ、賣春のね。下らない。

瑠王 愛が賣春の下らん趣味だ？ ちがいねえ。その講談本には、なかなかええことが書いてあると見える。そうじやよ、その通りじやよ。あの女神様は、その趣味豊かな女神様はよ、わしの友だちとあつさり寝たんじや、手と脚とをからませながらな。

禰莉 何だつてそんなことあたしに聞かせなくちやならないの。

瑠王 惚れたりはれたりすりや誰しもするこつた。淫賣だつてするこつた。

禰莉 ふむ！

瑠王 だがしかし、わしはちがう。わしの愛し方は自慢じやないが、ちつとばかしちがう。(低く) わしはママに、わしの肌を許さなかつた。わしがだぞ。

禰莉 ほんと、それほんと？ (瞬間、不思議な喜悅が溢れるが、すぐ

に消える)嘘だ、ママのほうで許さなかつたんだ。あんな嘘つ……。

瑠王 (まじめに) わしの子供を、ママが、生んだことがあるか。

禰莉 (歩きだす、考えながら) ああそうお……あなたもママを憎んだのね、ママに復讐したのね、ああ、そう……。

瑠王 復讐か? 何のこつた、そらあ。わしほどママに惚れとる男が他にあらうか……婚禮の晩、ママをひとりベットに寝かし、やさしい聲で、とてもやさしい聲で「おやすみ」、次に口のなかで「さよなら」と挨拶して引き下がつたわしじゃ。誓つてもええ。髪の手一條にすら觸りやしねえ。

禰莉 (残忍に) 惚れたりはれたりすりや誰しもすることを、なぜ、ママにだけしなかつたのよ。

瑠王 なぜ? ……お前は、氣の毒ながら、自分が女であるちゆうことまだ知らん……あれが女だ。あれだ、女の本性じゃ。

禰莉 へん! 本性なんてものがどつかにあるの。何だかわけもわからないのに、罪の深さを思い込ませようつていうとき使うわね。本性。

瑠王 いや、そうじやない。罪の深さか、恵みの深さか、そんなことは案外わからん。ただそのとき、ママは夢を見ていた。春の風のように、魂がゆらゆらとたゆとるのがわしには見えた……わしには。

禰莉 夢? 夢なの?

瑠王 そうじや、夢じや。ママは夢を見ることが出来る人さ……女はそうなのさ、夢をな。さよならを言つたわしが、部屋から出ようとしたとき……(苦しうに)突然、おそいかかつた、かよわい二本の手が、わしの首を抱いた。春の風のような、ふわふわつとした吐息ながら、わしの頬は焼かれるようじやつた!

禰莉、いらいらと歩きだす。

瑠王 そんなときに、女の美しい聲音を聞いたことはない……

運命の驟くような聲じやつた……(感傷を抜いた聲で) 私の口を吸つて、佛蘭西亞……胸を吸つてちようだい、佛蘭西亞!

禰莉 佛蘭西亞! 佛蘭西亞!

瑠王 ママの戀しい男の名前じや。

禰莉 あたしなら、即座に殺すわ、ママを。

瑠王 夢を見とる女を殺すことはできぬ。なぜなら……そのとき女が、一番、深く、美しいからじや。わしはママをまたベットに寝かした。あたかも……佛蘭西亞であるかのように。そして今度は、何にも言わずに、そつと出しまつたよ。……わしは何だか、かつても幸福に満ち溢れてな……ああ、あのオルガンのひびき……白ずくめの花嫁衣装にくるまり、赤と緑と黄の色ガラスの光を受けて、ほんのり血のさした蒼白い天使! 薄暗い寢室に咲いた白薔薇の精! わしの穢らしい生涯で、あんなに仕合わせな日があつたらうか! あんなに惨めな日があつたらうか!

禰莉 (冷酷に) なるほどね……そういうあなたの感傷は大事にしまつてお置きになるとして、結局、あなたはね、つまり、成り行きとお金の力でママの夫という地位を獲得して、社交界に入りたかつた。あなたのお得意をふやしたかつた。そういうことね。

瑠王 (愉快そうに) はは……わしはな、そうやつて夫婦の床から脱け出すとな、酒場に走つた。呑んだの呑まんのつて……正體もなく打つ倒れたわしは、別の女の寢床で目をさましたつてわけさ。それがそもそも、爾安奴との馴れ初めさ。

禰莉 さぞ、血しぶきが上がったことでしょうよ。

瑠王 へへ……おだてるない。意地が悪いぞ、案外、お前も。

禰莉 それから。

瑠王 それから? それからのわしのこととは、探偵さんに聞いてくれ。萬事ご存じの通りじやないか。月に一度、島に行つとつて、海が荒れたときを除いては、扶養者としての義務を果たすため、お前さんたちの前に現われねばならぬことに相成つた。至極、簡

單な話さ。

彌莉 簡單？ とんでもない。蛇の生殺しじやないの。ママはあなたの生けにえよ。あなたはそのやつて、あなたの復讐を、ちびちびとたのしんだんだ。

瑠王 何とも都合のええようにぬかせ。お前みたいに、裏熟りの青臭い子供に何がわかる。

彌莉 二十五よ、あたし。女が二十五つたら三十のことだ。よく覺えとくとい。

瑠王 それじや、その生殺しの復讐をだな、この年まで、六十の年寄りになるこの年まで、飽きもせんで同じことつづけてきたというの、どういふことじやと思ふ、え？ 「宅の主人は、鑛山のほうに行つとりますので、月に一度しか歸宅いたしません」なんて言う口實を、ママに與えるためか。そんなことはとるに足らん。本當はな……本當は……。

彌莉 本當は？ ……ねえ……。

瑠王 思う女に背かれても、その女が忘れられんほど打ち込んだ、そういう初一念の運命を背負わされた男の氣持というものが、お前にわかるか。運命の厳しい鞭に絶えず抵抗せにやならなかつた男の苦しさがわかるか。

彌莉 運命だなんて……ただの執念よ。いやらしい悪魔みたいな執念よ。

瑠王 なるほど、そうか、執念か。何でもいひや。わしはママを愛するために爾安奴を、牙魅亞を、巴宇羅を抱いた。抱かねばならなかつた。女たちを抱きながら、女たちを通して、ただ一人の女を抱こうとしたのじや。ただ一人の女を……その他名前の知れぬ……。

彌莉 (耐えきれず) ああ、もうつ！

瑠王 (ぐつとその手を掴み) ところが、(彌莉はその手を離そうともがく。瑠王は離さず、立ち上がつて、あくまで聞かせようとする) 女たち

の数がふえればふえるほど、不思議なことに、ママの存在はますますわしから遠くなつて行く。實體とは、實體とはなんじや？

假にわしが、假にだぞ、假にわしがママのからだを現實に抱いたとしても、ママはやつぱり、ママの影にしか過ぎんじやつたろう……彌莉、これでもお前は、わしの復讐と言ふか。執念と言ふか。いやらしい執念と。

彌莉 (痛そうにからだをねじる)

瑠王 もし復讐と言ふならば、(手を離し) わしのほうこそ復讐されたのじや。

彌莉 された？ 誰によ。誰によ。

瑠王 ……わしの孤獨に……孤獨に。

彌莉 (にやりとする)

瑠王 おかしいか。うん、おかしいな……(自分も弱々しい笑い聲をたてて) わしにもわからんのじやよ、實は……

わしは最前、自然とか運命とか、むだに、講釋をするにはしたが、わしという男はな、結局、愛などという言葉を使う資格のない男らしいよ。そのわけはな、要するにわしは、自分自身しか可愛がつたことのない男だからさ。いやらしいよ、まつたく。さ、歸るぞ、今度こそ。(立ち上がる) 長い間、お前の父親の座にすわり、お前をだましとつたことを許してくれ。だが、この役割はちよつと面白かつたぜ、憎まれていようがいまいがな。まあしかし、生きて再びお前に會うこともあるまい。わしは、今夜にも港を立つ。出帆は明日だ。なあに、わしのこととは心配はいらん。どうせ第二の牙魅亞が現われて、濁酒を作りながら、島でのわしの世話をしてくれるじやろう。へ……好きだね、まつたく、へ……。

ずつと背中を向けたままの彌莉の後に立ち、肩に両手をおいて、

瑠王 (やさしく) わしにははしかし、實の娘同様に思えてな……何しろ、兩脚を持ちあげて濡れたおむつを取りかえてやつたことも二



三度はある。

禰莉 知らないつ、知らない。

瑠王 はは……それから、來月からはな、わしのかわりに公證人が金を渡しに來ることになつとる、わしの死ぬまではな。その男がお前たちの様子をわしに知らせてくれる約束じや。もし、わしが死んだら……多分、酒のなかで死ぬじやろうが、死んだら、わしの鑛山は、皆、お前のものになるじやろう。また債券類一切。だから暮らしの心配は一切いらん。ただ島だけはな、わしの第二の牙魅亞に勘辨してやつてくれんか、な。(帽子とトランクと傘をとりに行き、最後にじや、ママを、身寄りのないママをな、わしのかわりに大事にしてやつておくれ。そして、わしが、呑んだくれの助平爺が、こう言い残したと傳えておくれ。わしは、ママを、ママを、本當は……(言い淀み)……尊敬しとつた……ママは、わしに生きる目的を、……命の灯を與え續けてくれた、とな。ご免。(去りかける)

禰莉 (叫ぶ) ババ!

瑠王 (立ち止まる)

禰莉 (兩手を絞る)

瑠王 何か言つたか。

禰莉 いいえ、何でもない。お別れのご挨拶をしようと思つただけ。

瑠王 別れの、キッスぐらいな、義理の親子として。

禰莉 (激しく抱きついて早口に) ちがう、そうじやない。あたしは、ババの子よ、そうでしてよ。今のお話は皆、お別れらしくするための作り話だ。ババのお芝居だ。ね、そうでしょ。ね、嘘だと言つてよ、嘘だと。(呻くような嗚咽が洩れる。やがて、さつと離れる)

瑠王 (冷やかに) わしはもうどつちでもええ。實の娘であらうとなかろうと、どつちでもええ。どうせわしの孤獨に變わりはないんだ。それより、おい、誰に習つた、そのキッスは、え? はは……お前はわしをしめ殺したいほど、わしに惚れとるのとちがう

か、はは……。

禰莉 (唇を手でこすつて) 酒臭い、やに臭い。

瑠王 はは……牙魅亞のみたいだ、お前のは。火だよ。大事に使いなさい。(歌いだす) オープレ・ド・マ・ブロードじやねえ、縮れつ毛え、キルフエ・ボン・フェ・ボン・フェ・ボン……オープレ・ド・マ・縮れつ毛え、キルフエ・ボン・ドルミール……。(歌いながら、揚々と去る)

扉の鈴が鳴ると禰莉、はつとして動こうとする。が、踏み留まり、煙草に火をつけ、ラジオのスイッチをひねり、ソファにかけする。目がうるんで、深味をましている。そして、片手を唇にあてたりする。ついで、卓上のお札を、わしづかみにズボンのポケットに入れる。残りの葡萄酒をやはり口呑みでのむ。片手を頭の後にやつて、ソファに横になり、兩脚を延ばす。動作が荒つぱい。煙草の煙が昇るのを見ている。

再び扉の鈴が鳴る。ちよつと、頭をもたげただけで、禰莉はそのまま。鞆を抱えた翡江流(四十八歳)が覗く。臆病そうな目のなかに、學者ふうの落ち着きと粘り強さが見える。風采は上がらないが、たまたまネクタイをとつた薄茶のワイシャツが、運動家みたいに、或る無造作な通俗味を出している。自轉車を飛ばして來たので、ハンケチで額を拭いている。

翡江流 入つてもいい。

禰莉 (起きて) あら、ママかと……。 (ラジオを消す)

翡江流 (入つて來ながら) 表玄関がしまつてるもんだから……お客様?

禰莉 ううん。ママもいません。(改まつて) いらつしやいませ。(握手する) 毎度すみません、勝手にお休みいただいて。急患ございませんでした?

翡江流 あればこれからだが、弗列寧に押しつけて來ちやつた。今ね、僕の自轉車、年寄りの酔つぱらいに打つ突かりそう。片手には傘、片手にはトランクぶら下げて、いい氣持で歌いながら、ヒョロヒョロ來るんだもの。